

「はじめに夢があった」

2021年7月

中学宗教主事 川俣 茂

その後

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。

あなたたちの息子や娘は預言し

老人は夢を見、若者は幻を見る。 (ヨエル書3章1節)

「はじめに夢があった。教会の中に夢があった。教会の環境に於いて教育ができればどんなによいだろうと、

何人もの先輩がこの夢を懐きつつ、どれも実現しないで天に召されていった。」

これは1951年4月6日、清教学園中学校開校式での初代理事長、橋本通先生(日本基督教団河内長野教会牧師)の式辞の一部です。

清教学園のはじまりには「夢」がありました。戦争が終わった直後で、何も無い状況ではありましたが、皆、「夢」を持っていました。その「夢」は、「教会の中」で抱かれた「夢」であり、具体的には「教会の環境に於いて教育ができれば」というものでした。多くの「夢」がそうであったように、「夢」で終わってしまうのではないかと思うような時がしばらく続きましたが、それでもその「夢」を捨ててしまうことはなく、いつか「実現する」と信じていました。

この「夢」を抱いたのは、教会に集う人々、大人だけではなくありませんでした。清教学園の前身である「清教塾」に集まっていた中学生を中心とする塾生たちも同じ「夢」を抱いていました。「自分たちの学校が欲しい」「キリスト教に基づいた学校が、今のこの時代、この河内長野の地に必要だ」という「夢」。この「夢」の実現のために、塾生たちは「自分たちにできることは何だろう」「自分たちだからこそできることは何だろう」と皆で考え、そして行動に移しました。それが「すくどかき」と呼ばれる出来事です。皆で議論し、プランを練っていくことも重要です。しかし塾生たちは「机上の空論」ではダメだということに気づいたからこそ、行動に移しました。この行動こそが、それまでは「夢」にすぎなかったものが、「学園創立」という「夢の実現」に向けた第一歩となったのです。その結果、ささげられたのは770円(現在の貨幣価値に換算すると20,000円くらいになるのでしょうか)。わずかな金額かもしれませんが、学園創立にとってはとても貴重な金額だったといえるでしょう。

この「夢」が1951年に実現してから、70年の歳月が流れました。「もう無理だ」「実現なんかするはずがない」と思うのではなく、清教塾の塾生たちのように、実現することを神に祈り願いつつ過ごしてきた結果です。時間を無駄に過ごしてしまうことなく、自分たちで自分たちに限界を決めてしまうのではなく、「夢の実現」に向けて、自分たちでできることをしていった結果です。

「夢」を持つことはとても大切なことですが、その「夢」を実現できるかどうかは、あなたの行動力にかかっているといえます。清教学園は1951年の創立以後も、数々の「夢」を抱いてきました。実現しなかった「夢」もあるかもしれません。しかしここに清教学園が存在し、70年の歴史を刻んできたことも事実です。存在と歴史がすべてを物語っているといえるでしょう。

もう一つ清教学園の歴史を顧みた時、清教学園だからこそ「夢」の実現に向けて力強く歩むことができた理由があります。それは神の存在です。「夢の実現」に向けて、自分たちでできることをする、その背後には多くの「祈り」がありました。神を信じ、神に信頼した人々の姿がありました。清教学園は「祈りによってできた学校」、「清教の歴史は祈りの歴史」とよく言われます。前身の清教塾でも、清教学園でも「祈り」を大切にしてきました。祈りつつ、「夢」の実現に向けて仲間と共に歩みを進める、そしてその「夢」が実現したら、仲間と共に喜ぶ。学園の歴史はこの繰り返しでした。その歴史に触れることができ、またその歴史をともに担うことができる、それが清教学園で学ぶ醍醐味の一つだと思います。

さあ、あなたはどのような「夢」を抱き、どう考え、どう行動しますか。

SEIKYO GAKUEN